

森林・農業班 A

牛・水牛をめぐる文化と社会経済変化
：ウドムサイ県・ルアンパバーン県・サワンナケート県に関する予備的調査報告
高井康弘（大谷大学文学部）

キーワード：牛・水牛、地方食肉流通、放牧、移住

調査期間・場所：2004 年 8 月 23 日－9 月 17 日、
 ルアンパバーン、ウドムサイ、サワンナケート

Socio-economic Change and Culture on Cattle/Water buffalo :
A Preliminary Survey Report on Oudomxai, Luangpabang and Savannakhet

TAKAI Yasuhiro (Faculty of Letters, Otani University)

Keywords: Cattle/waterbuffalo, local market, pasturage, migration

Research Period and Site: 2004, August 23 – September, 17, Luangpabang, Oudomxai, Savannakhet

1. はじめに

本研究ではラオスにおける人々と牛・水牛の関わりに焦点を当てる。従来、当地においては、牛・水牛は、人が自然と付き合い生態環境を創り出す上で重要なパートナーであった。人々は牛・水牛を意志伝達・操縦可能な役畜として飼い慣らし、水田犁耕や交通・搬送に利用してきた。使役時以外は牛・水牛は林野に放たれていた。牛・水牛は動産であり、蓄財の手段にもなったし、カミや祖先への供応物、宴のご馳走にもなった。つまり、人が他の人あるいはカミと贈与や交換を通じて関係を紡ごうとする時、牛・水牛は重宝な存在として利用されてきた。ひとつには、人々と牛・水牛の関わりのうち、これらの諸側面を検討する。

また、牛・水牛と人の関わりを考える上では、牛・水牛（肉）流通とそれらを担う人々にも目を向ける必要がある。とくに 1990 年代以降、牛・水牛（肉）を扱う業者が急増し、売買が活発化している。この様相について検討する。

初年度（2003 年度）と本年度（2004 年度）は、ラオス北部の牛・水牛（肉）流通の現状の見取り図を得ることに力点を置いたので、以下はまず、その点について述べる。また、牛・水牛飼育にかんする概括的調査をおこなったので、その資料のなかから、いくつかのトピックを取り上げ報告する。

2. ラオス北部の牛・水牛（肉）流通の現状と 1990 年代以降の変化

〔1〕ルアンパバーンの牛・水牛（肉）流通と黒タイ来住民

2003 年度はルアンパバーン県、ウドムサイ県で調査したが、とくにルアンパバーン県中央部の牛・水牛（肉）流通の現状と 1990 年代以降の変化の見取り図を得ることに重点を置いた。その成果の一部は「ルアンパバーンの牛・水牛肉流通と黒タイ来住民」（北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティ』東信堂、2005 年、所収）として刊行した。

ここでは、まず流通の主要ルートの現状を次のように描いた。すなわち、一般低地農家や山地民の間で飼われている牛・水牛を、ルーなどさまざまなエスニシティの在村仲買人が買い付ける。そしてルアンパバーン市周辺部の食肉卸業者に売る。卸業者は現在 8 名いるが、そのうち 7 名が P 村在住の黒タイの人々である。彼らは水牛をルアンパバーンの屠場で屠畜・解体し、同村の黒タイ女性の小売人などに卸す。彼女たちは、ベトナム資本が国有地の無償貸与を受けて 2002 年に新設したポーシー市場などで小売する。牛は卸業者がビエンチャンの卸業者に転売する。

次に、P 村在住の黒タイが同業を担うに至った経緯を明らかにした。P 村は 1950 年代中頃、ベトナム国境付

近から移住してきた人々によって形成された。新参者で農地の無い彼らは、たまたまフランス植民地期 1920 年代建築の屠場が近接していたために、当時の卸業者に作業員として雇われるようになった。そして 1975 年の社会主義体制への転換後、旧卸業者が亡命し、政府直轄、国有会社化を経て、1990 年代以降、再自由化を進むなかで、彼らが牛・水牛食肉卸業を担うに至った。

ルアンパバーン中央部の牛・水牛（肉）流通については以上だが、この事例がラオス北部の一般的特徴を代表しているかどうかはわからない。ラオス北部の食肉流通の様相については、さらに複数の事例にあたり、ルアンパバーンの事例を相対化しつつ、検討を進めることが必要と考えた。

〔2〕ムアンサイの人口増加と牛・水牛（肉）流通

2004 年度は、まず、ルアンパバーンの事例と比較すべく、ラオス北部ではルアンパバーンに次ぐ行政・商業の拠点地であるムアンサイの食肉卸業者、屠場、生鮮市場の変遷と現状を調べた。

ウドムサイ県の県庁所在地であるムアンサイは、中国・タイ・ベトナムに通じる幹線道路が交差する交通の要所で、ラオス北部の貿易の中心地である。富裕な商人宅を思われる家屋も多く、中国から来ている建設労働者の姿などもみかける。1990 年代中頃の市街部の人口は約 1 万 2,000 人とされる〔UNDP 1996〕。ムアンサイの比較的古い居住地区は、ラオ人の集落であるときくが、新住居地区が拡大しているようである。たとえば、20 - 30 年前はチーク林であったパーサク村は、村長からの聞き取りによれば、2004 年時点で 200 世帯、人口 1,180 人を数える。低地ラオに加えて、ベーン郡やフン郡から来住したカムの人々が 40 戸を数え、さらに 2000 年前後にクワー郡から来住したホーの人々が 60 戸を数える。周辺のチェーン村やプーキオ村も同様に来住者が構成する新村である。

当地で古くから牛・水牛肉販売業に関わっていた人物を尋ねるうちに、IN 氏が浮かび上がった。彼は重病のため、妻（54 歳）から話を聞いたが、その内容は次のとおりであった。すなわち、彼は黒タイで、1975 年頃にサイヤブリーから行政の要職にある兄を頼り同地に移住し、屠畜・食肉販売と精米所を手がけた。社会主義体制期に入ったため、国有会社に属する公務員のひとりとして働いた。政府支給の仕入れ資金を携え、同行の会計係とともに、ベーン郡やフン郡方面を歩き、農家と交渉し、水牛を仕入れた。当時、牛・水牛を扱うのは彼のみで、豚を扱う業者はいなかった。当時は戦争直後であったが、戦時は農家は豚飼育の時間がなく、豚はほとんどいなかったからである。水牛は森に放牧していたので、当時でもある程度いた。牛もいたが水牛の方が多かった。水牛を仕入れると、現在カイソーン像（1995 年頃建造）が立つあたりにあった国有会社の敷地内の屠畜小屋で、未明に屠畜・解体し、早朝と夕方に小売した。売り場は次々と移動した。4 頭屠畜した日もあったが、仕入れのない日は屠畜しなかった。屠畜や小売はカム、モン、ラオなどエスニシティはまちまちな 5 - 6 名の男性の協働でおこなった。売上げは国有会社にいったん戻し、月給を受け取った。売上げが良いと報償があった。1985 年まで同業に従事していたが、重労働で身体を害し、廃業した。

IN 氏が活躍した時期は社会主義体制期（1975 - 1985 年）にあたる。後述の BC 氏（46 歳）は、当時を振り返って、（IN 氏の妻の言と齟齬があるが、）国有会社は 1 日に豚あるいは水牛を 1 頭屠畜・販売する程度で、それでも売れ残るほどだったと話す。当時は市街の人口も少なく、住民は祭りの宴などで食べる時は、勝手に自分たちで屠畜するし、普段は食べないので、市場での食肉購買需要は無かったとも話す。

1990 年代に入ると個人経営者による食肉販売が許可される。1990 年、国有会社は食肉販売から手を引く。プーキオ村在住のカムの BC 氏は、1991 年に牛・水牛・豚肉卸業に参入する。同業者は当地ではナイホーイと呼ばれている。彼によれば、牛・水牛は県内ではベーン郡とナーモ郡に多い。ただし、前者は先輩格の SP 氏が縄張りになっているので、彼はもっぱら後者で牛・水牛の仕入れをしている。彼はナーモ在住の仲買人 4 組（いずれもカム）から買い付ける。仲買人は一般農家から牛・水牛を仕入れている。豚はナーモ郡やラー郡で仕入れる。2001 年に購入した小型トラックを運転して行く。

SP 氏はパーサク村在住のカムで、1980 年代は公務員であったが、1994 年に BC 氏、KW 氏と合資して私設屠場の経営を始めた。KW 氏が場長、SP 氏が副場長である。KW 氏もパーサク村在住のカムで、軍人から公務員になり、80 年代前半に来住した。食肉卸に従事しつつ屠場を営んでいる。いかにもやり手といった感じの人物である。白亜欧風 2 階建ての住居は、周囲の家屋とは明らかに異なる。私設屠場は、1994 - 1996 年

はラックヌン、1997 - 1999年はパーサク村、2000年以降はノーンメンダー村に移動して、現在に至る。ノーンメンダー屠場では、1日当たり水牛なら平均2 - 4頭、牛なら7頭前後を屠畜するが不定である。ラオ正月や競漕祭のある月は増えるが、田植え、稲刈りの農繁期は農民が売却に来る時間がないので牛・水牛は入荷薄になり、屠畜頭数は大幅に減る。また、豚は平均1日当たり18 - 20頭を屠畜する。布薩日も休まない。屠畜時間は深夜2時から早朝6時までと午前11時から午後1時までである。同屠場を利用する牛・水牛肉卸業者12名だが全員カムの人々である。豚肉卸業者は33名で、プーノイやホーやルーなどの人々である。彼らはそれぞれ鮮肉を売りたい日に、牛・水牛・豚を持ち込み、屠場経営者に屠畜代を払う。屠場経営者は月給制で水牛屠畜作業員5名（全員カム）、豚作業員6名（カムが5名）を雇っており、屠畜・解体する。現在、鮮肉小売はムアンサイの主要3市場であるノーンレン市場、ノーンメンダー市場、バーンティン市場のうち後二者でおこなわれている。両市場の売り棚には鮮肉が豊富にみられるが、鮮肉の大半は同屠場で処理されたものである。牛・水牛肉小売人はほとんどがカムの女性であり、請負小売人である場合が多い。彼女たちは屠場で肉を受け取り、市場で売り、売上げをいったん卸業者に戻し、キロ当たり500キープを受け取る。こうした不利な形態をとらざるをえないのは、卸業者から肉を仕入れる資金が無いからである。豚肉の場合は、ホー、ルー、プーノイなどの卸業者が鮮肉を市場に持ち込み小売するケースが多い。ノーンメンダー市場の小売人は2班あり、両班が1日交替で売り棚を使う。バーンティン市場の小売人は3班あり、3日周期の輪番で売り棚を使う。2つの市場の複数の班に登録している小売人もいれば、1つの班だけに属している小売人もいる。

なお、ムアンサイには、私設屠場がもうひとつある。軍駐屯地内の屠場である。同屠場は、前述のルアンパバーン市周辺部P村の黒タイの息子が経営しており、1日水牛1 - 2頭を屠殺し、主に軍関係の需要をまかなっている。

以上、ルアンパバーンとウドムサイの牛・水牛肉流通について述べたが、北部地方の市場に流通する牛・水牛は、必ずしも政治経済拠点の街であるルアンパバーンとムアンサイに集中するわけではない。両県域には多数の小市場がある。たとえば、ルアンパバーンとムアンサイを結ぶ幹線道路沿いには、ナムトゥアム定期市やナムパーク常設市などがある。また、ムアンサイとパークベーンを結ぶ道路沿いには、ムアンベーン常設市やムアンフン常設市がある。ムアンサイからナーモ方面の道路沿いにも常設市がある。それぞれの近在には、農業等と兼業しながら、牛・水牛を仕入れ屠畜解体し、鮮肉を販売する業者がいる。以下は、比較的、聞き取り資料が得られたナムトゥアム定期市、ナムパーク常設市、ナーモ常設市を利用する業者の事例を報告する。

〔3〕ルアンパバーン・ウドムサイ周辺の小市場と牛・水牛（肉）販売業者

（1）ルアンパバーン - ムアンサイ沿道

ルアンパバーン県北部ナムパーク郡の行政担当者によれば、同郡域には常設ナムパーク市場のほか、5つの定期市があり、それぞれに食肉販売業者の班がある。2003年度はナムパーク市場、2004年度はナムトゥアム定期市を調査した。

ナムトゥアムは政府の開発拠点のひとつになっている。同村はラオの人々50戸ほどの集落であったが、1994年にカムの人々がボンサーリー県クワー郡、サムパン郡などから政府の命令によって移住してくる。もともと林だった地に1994 - 95年に定期市が開設され、道路建設工事が始まり、97年に完成する。ナムトゥアム村は2つの集落に分かれているが、市場近在で道路沿いの新村である北村だけで現在327戸ある。2000年以降、市場は常設となる、ただし、多くの商人が集まるのは、現在も10日に1回である。ルアンパバーン県パークウー郡域、ナムパーク郡域の小定期市の開催日は、ムー・カー、ムー・カップで始まるルーの10日周期の日暦で決まっている。地域の人々には定期市の開催日がすぐわかるが、部外者には開催日が知れない仕組みであるという。ナムトゥアム定期市の場合、遠来の業者はムー・カップの日に来て泊まり準備し、近在の人はムー・ハップの日の未明に来る。市は早朝から夜まで開き、翌日ムー・ハーイの午前11時頃閉じる。

屠畜・食肉販売業の動向は次のとおりである。市場開設の1995年に食肉を売る人は現れる。当初は業者は2名のみで、毎日豚を1 - 2頭屠畜し、朝夕にラオや中国人に売っていた。水牛は定期市開催日に1頭屠畜販売していた。その後、業者数は急増し、2004年時点では6組の班がある。各班は2 - 3名で構成されており、業者数は15名となる。大半がカムの人々である。6班が市場での販売を5日ずつ輪番する。ひとつの班が1日当

たり豚2頭を屠畜販売し、5日連続販売し、次の班に回す。また、定期市開催日は、3つの班が水牛2-3頭を屠畜販売し、他の3つの班が豚3-4頭を屠畜販売する。次の定期市には、水牛販売班と豚販売班を入れ替える。平常の豚販売当番日の1日が、定期市開催日と重なった場合は、平常当番日が1日減ることになるが、そのまま5日毎に輪番していく。

業者たちは北ナムトゥアム村か南ナムトゥアムの村人で、農業の傍ら、牛・水牛・豚肉を売る。水稲作は1名のみで、他は焼畑作のみをおこなっている。女性は農作業に従事し、男性が家畜を仕入れ、屠畜し、鮮肉を販売する。水牛の仕入れはポンサーリー県方面へ車に乗せてもらって行き、その後は徒歩で仕入れに歩き、買った水牛を曳いて道路まで出て、トラックを雇って戻ってくるという。仕入れた家畜は、業者のひとりが2000年に建てた村内私設屠場で屠畜する。

ナムトゥアムから北東へ行くとパークモンに至り、さらに行くとナムパーク市場に至る。同市場は屋根付常設市である。生鮮野菜等が多く売られているが、鮮肉販売もある。業者たちは市場利用機会の平等性を確保すべく、やはり輪番制をとっている。すなわち、業者は30戸が15班を組んでおり、各班は1家族ないし複数の合資仲間で構成されている。各班は割り当て時間帯に売るべく、仕入れ、屠畜する。夕方(午後3時以降)から翌早朝(午前4時-6時)の時間帯は、14の班が輪番する。2週間に1回順番となり、豚5頭前後を屠畜して売る。水牛を仕入れて、屠畜販売する当番班もあるが、それは3日に1頭程度にすぎない。午前(8時-12時)は毎日、1つの班が豚を1頭屠畜販売する。業者は市場があるポンサアート市街区在住者で、ラオが12名、カムが2名、黒タイが1名である。現行の輪番制になったのは、2003年以降で、それまでは7班だったという。

(2) ムアンサイ-ナーモ沿道

ウドムサイ県域にも小市場が点在する。ムアンサイからベン川沿いに南西に走る道路沿いには、ムアンベン市場やムアンフン市場があり、鮮肉も売られている。2003年度に若干、聞き取りをしたが、ここでは紙幅の都合上、省略する。ムアンサイから北西に走るとナーモ郡域に入る。本年度、同郡のホームサイ市場周辺ファイオン村の業者の聞き取りができたので、次に紹介する。

ファイオン村は204世帯、歴史の古いカムの集落と言われる。同村と隣村ナムセーにそれぞれ牛・水牛班と豚班があり、両村の班は隔日交替で、村周辺および近くのカートサイ村のホームサイ(ナーモ)市場において、牛・水牛2頭分と豚2頭分を屠畜・販売している。彼らは在村仲買人でもある。たとえば、ファイオン村在住のKK氏(42歳)は次のように述べる。従来は水稲を0.8ヘクタール作るのみであったが、2000年に同業を始めた。村の男性(カム)5名で班を組み、各200万キープを出し合い、その仕入れ資金を携えて歩いて仕入れに行く。ナーカム村やナーモ村は牛も水牛も多数飼っているの、よく行く。仕入先の農村へ通じる車道はないし、5名ともバイクも車も持っていない。購入した牛・水牛は曳いて帰ってくる。当番日には午前2時に1頭、午前9時に1頭を、5名で協働で屠畜・解体して売る。この地域には、他郡や他県から業者が牛・水牛を仕入れに来る。ムアンサイの業者は同一県なので、免税優先枠をもっている。彼らが来たら、ストックしている牛・水牛を売りもする。(前述の)ノーンメンダー屠場のBC氏は月5回ほど来るが、1回に6-7頭仕入れていく。

[4] ラオス北部の地域比較

以上、ラオス北部ルアンパバーン県域とウドムサイ県域の牛・水牛肉流通の現状と近年の変化について、2003年度と2004年度の聞き取り調査に基づいて記述した。以下、その特徴を列挙しておく。

① ルアンパバーンと同様、ウドムサイ県域においても、食肉業者は1990年代初頭以降、流通の表舞台に現れる。ここ10年でその数は急増している。

② ルアンパバーン、ムアンサイといった県庁所在地レベルの政治経済拠点の街には、大きな生鮮市場があり、鮮肉が豊富に並ぶ。資本やトラックをもつ専門卸業者が広域的に活動している。しかし、両県域には小地方市場も多数存在する。そこでは小規模な在村兼業の屠畜販売業者が合資して班を組み、活動している。彼らの多くはトラック等を持たず、徒歩で買い付けに回っている。

③ 多くの市場で鮮肉は業者の輪番で小売されている。ルアンパバーンのポーシー市場ではそうではないが、ムアンサイ、ナーモ、ナムパーク、ナムトゥアムの市場は輪番制である。輪番の形態は多様であった。輪番制は

機会や負担を平等にするための慣行的手法かと思われる。ただし、彼らのそれは、同業が萌芽期から膨張期に入り、業者が急増するなかで営業機会の平等を確保し、とりあえずの秩序を維持すべく、近年導入された過渡的処置のようである。今後、業者淘汰が進めば、別の形態に移行する可能性も高い。

④ ルアンパバーンとウドムサイでは、人口増・食肉消費増とともに活発化した食肉流通に、従来の生態から切り離された新来住の非上座仏教少数派エスニシティの人々が、多く関わっている。ルアンパバーン中央部では黒タイ来住民が同業を担う。ムアンサイやナーモ郡では新来住のカムの人々が同業を担う。例外はナムパークで同業者にはラオが多い。

〔5〕 サワンナケート、ノンカーイなどの事例との比較

本年度は、北部の事例を相対化すべく、中部のサワンナケート県域でも資料収集した。また、中部のターケーク、タイ東北部のノンカーイ、ウドンターニーでも資料収集した。

サワンナケート市街部には、かつて市中心部に公設のクラーンムアン市場があったが閉鎖され、シンガポール資本が投資して新装したサワンサイ市場ができた。近郊にも夕市のサーマッキーサイ市場（2002年）、朝市のラックソーン市場（1999年）、ラックペート市場（2004年）など大きな公設常設市場が矢継ぎ早にできている。

サワンサイ市場の場合、牛・水牛肉小売が20軒、豚肉小売が15軒ほど出ている。輪番制はない。同市場の鮮肉小売量は、ムアンサイのノンメンダー市場などより明らかに多く、ルアンパバーンのポーシー市場よりもやや多い印象をもった。

牛・水牛肉は、赤身肉・あばら肉・内臓などに分けて売られるが、各市場で部位の範疇分けに差異は無かった。小売値には相当な格差があった。たとえば2004年調査時点の赤身肉のキロ当たり小売値は次のとおりであった。ナーモ市場1万6,000キープ、ナムトゥアム市場1万8,000キープ、ムアンサイ軍駐屯前店、ノンメンダー市場、バーンティン市場いずれも1万9000キープ、ルアンパバーン・ポーシー市場2万4000キープ（上肉）－2万2,000キープ（下肉）、サワンサイ市場3万（上肉）－2万3000（下肉）キープ、サーマッキーサイ市場2万8000キープ（上肉）－2万2,000キープ（下肉）である。この格差は市場価格一般の都市－農村間格差を反映するものであり、各市場がそのなかでどのような位置づけになっているかを考える上での参考資料となる。なお、ポーシー市場では2002年の水牛赤身肉小売値は1万8000バーツ、2003年は1万9000バーツであったので、一段と値上がりしたといえる。ムアンサイ市内市場の水牛赤身肉の小売値も昨年より1万7000キープから上昇している。価格の上昇は、キープの対バーツ、対米ドル価値の相対的下落が大きな要因である。全体の価格・賃金動向のなかで食肉価格の動向をみる必要があるが、この点は後日の検討したい。

サワンナケート市の生鮮市場に供給される鮮肉は、市の北方近郊5キロ、カンタブリー郡ドーンセーン村の屠場で食肉処理される。同屠場では通常日は1日当たり牛・水牛を各10頭程度、豚を30－40頭、毎日屠畜する。ちなみに、2003年に調査したルアンパバーン屠場の通常日の平均屠畜頭数は牛・水牛合わせて13頭であった。ムアンサイのノンメンダー屠場の場合は、前述のように、牛や水牛が2－7頭であった。これらの数値から、市場に流通する牛・水牛鮮肉の、サワンナケート、ルアンパバーン、ムアンサイの各市における消費量を類推することはできよう。

ドーンセーン村屠場は2000年建設の私設屠場である。同屠場を利用する牛・水牛肉卸業者は15名、豚肉卸業者は30名いる。全員低地ラオである。屠場が雇った作業員が屠畜・解体をおこない、卸業者は代金を払う。屠畜方法は棍棒（マイ・コーン）でまず額（ファ・コーン）を打ち、さらに首後部（トムコー・サムンゴーン）を打つ。そして、喉をナイフで突き（テーン・コー）、血を抜き採る。作業員1名が腹の上に乗る、血を押し出す。その後、個体を仰向けにし、4本の脚を紐で固定し、皮をナイフで剥ぐ。個体をそのまま火で炙ってから、解体する場合もある。ラオスの屠場で機械化しているのは、ビエンチャン最大の屠場であるノードゥー屠場のみである。ビエンチャンの他の屠場や北部各地の屠場では、ドーンセーン同様、屠畜・解体は熟練の手作業でおこなわれていた。

卸業者や屠場関係者からの聞き取りによると、同屠場で食肉処理される牛・水牛の7割は、県内ピン郡セーポンあたりから買い付けられて来る。牛・水牛は雨季の方が入手し易い。というのも放牧地が狭く、雨季は牛・水牛が稲を食害するので、放牧者はずっと帯同して見張らねばならず、手間がかかるので、この時期に手放す農

家が多いからである。仕入れの競合相手は隣国の業者である。2002年まではタイの業者の買い付けが目立ったが、以降は政府が許可していない。代わりに、2004年に入り、ベトナム人業者が大量に買い付けるようになり、彼らはラオの業者より20万キープほど高い買い付け価格を設定してくるので、対抗できず、仕入れは困難になっている。

サワンナケート、ターケーク、ノーンカーイ、ウドンターニーといった地域では、流通におけるベトナム人の活躍が目立つ。ただし、食肉流通における彼らの位置は一様ではない。サワンナケート、ターケークの市場では、牛・水牛肉小売、屠畜・食肉卸はほとんどラオの人々がおこなっていた。ベトナム人は惣菜売り等で、食肉にはほとんど関与していなかった。これにたいして、ノーンカーイとウドンターニーでは、ベトナム人が屠畜・食肉販売に多く活躍し、タイ人は野菜・惣菜・花売りなどに従事していた。前述のように、ラオス北部では黒タイやカムといった非上座仏教徒のマイノリティの新来住者が牛・水牛流通に主に関わっていた。ノーンカーイやウドンターニーのベトナム人も、同様に非上座仏教徒のマイノリティである。しかし他方、サワンナケート、ターケーク、あるいは前述のナムパークではラオの人々が同業に関わっていた。宗教や移動といった要因と職業選択との関係については、歴史的経緯に関する資料収集を進めるなかで、理解を深めたい。

以下では、活発化している牛・水牛流通と飼育農家との関係、および農家の牛・水牛飼育のありように、記述の焦点を移す。

3. 一般農家と牛・水牛の関わり の現状

〔1〕 一般飼育農家と牛・水牛（肉）市場

ラオスでは、流通市場に供給される牛・水牛の大半は、低地一般農家や山地民が飼育してきたものである。彼らの間を回り、牛・水牛を買い付けるのが、地方の小規模屠畜販売業者や仲買人である。こうした業者は幹線道路沿いの農村を中心に増えている。彼らにはさまざまなタイプがある。農業に主に従事し農閑期の乾季のみ活動する者もいれば、運送業の傍ら、活動する者もいる。また年中専業で活動する者もいる。徒歩で近隣を回る者もいれば、トラックで広範囲を走る者もいる。山地に入る者もいれば、道路沿いの低地のみを回る者もいる。在村仲買人のなかには経済的に成功する者、人的ネットワークの広さを買われ、村長など地域政治のリーダーになっていく者も少なくない。ただし、近年の買い付けの過当競争、品薄状況のなか、売り手に足元をみられ、仕入れ値が上がっている状況を嘆く仲買人が多い。

牛・水牛の需要増を受けて、牛・水牛のファーム経営を考えている牛・水牛肉卸業者は少数いる。しかし、彼らは政府に畜産振興の政策が無いと嘆く。今回の調査においては飼育農家の間にはファーム経営を見出せなかった。

一般の飼育農家は、計画的に市場販売を目的に肥育・繁殖しているわけではない。彼らは家屋の新改築や子供の結婚など、一時的に多額の現金が必要になった時に、牛・水牛を売却する。もっとも高値で買い付ける業者に売る。水牛の売値は時々の農業機械の価格相場と連動するとの話もある。一般飼育農家においては、牛・水牛はたんなる財ではない。その端的な例は、上座仏教徒ルーの集落であるパークウー郡F村における次の儀式である。すなわち彼らは、牛・水牛を屠畜につながる業者に売却した後、食台パーカオを用意し、肉以外の野菜やご飯やお菓子などを載せ、寺院に持って行き、追善供養し、功德を水牛の靈魂に回向してもらった儀礼を僧侶におこなってもらう。

幹線道路沿いの農村では、市街部から毎朝、牛・水牛肉売りの行商がやってくる。農外就労者で現金収入があり、淡水魚などを漁撈・採集する時間の無い者は日常的に購入している。しかし一般農村の食生活においては、牛・水牛肉はいまでも非日常時のご馳走である。彼らは多くの場合、牛・水牛を、市場流通の専門業者を介さずに調達し、自分たちで屠畜・解体して食している。次のナーモ郡アーイ村の例は、極端に宴の頻度が高い点で典型例ではないが、興味深い例なので紹介しておく。

ナーモ郡アーイ村では、大きい祭の時、水牛を屠畜する。大祭（ブンヤイ）は4つある。ブンチエン、正月、安居入り、安居明けである。安居明け日にブン・マハーサート（布施太子報恩講）もやる。正月にはロケット飛ばしもやる。祭りは隣村のクワーン村、ナムンガン村と3村合同でおこなう。大祭の宴のために水牛1頭を屠畜する。牛は釈尊の養母的存在なので屠畜は禁忌である。同様に鶏、蛇の殺生も禁忌である。鶏はまったく食べ

ないわけではないが、村人はあまり絞めたがらない。また、持戒日のうち、半月の日は小持戒日（シン・ノイ）で屠畜可能だが、満月と新月の十五夜の日は大持戒日（シン・ヤイ、布薩日）で屠畜はタブーとなる。安居入りと安居明けは大持戒日なので、前日に屠畜しておく。水牛は村人が合資して仕入れ、村の有志で屠畜する。村敷地の外の林でおこなう。村内での屠畜が禁忌というわけではない。清潔でないからである。屠畜施設がちゃんとしているなら村内で屠畜してよい。自分たちで飼っている水牛は屠らない。可愛そうである。他の村から買ってきた水牛を屠畜する。屠畜の際にとくに儀礼はおこなわない。

大祭以外にも、大持戒日、小持戒日の前日には、各家に仲間が集まって、一日中、水牛肉を食べ、焼酎、ビールを飲む。同村と隣村クワン村にはそれぞれ10の組（チュ）があり、各組は10～12戸で構成されている。7日毎にやってくる持戒日前日には、水牛1頭を屠殺する。アーイ村の当番組とクワン村の当番組が、半分ずつお金を負担して、水牛1頭を購入し、肉は両組が等分し、それぞれの村で村人に振る舞い分ける。こうした形で、10の組が大小持戒日前日の宴のための水牛購入を輪番していく。

以上のアーイ村の例は、宴の頻度や輪番制や持戒日と宴の関係において特殊な例である。同村でこれだけの頻度で宴ができるのは、中国との牛・水牛の闇貿易等で彼らに比較的現金収入があるからかもしれない。しかし、祭り等において人々が合資して牛・水牛を隣村から仕入れ、屠畜し、宴のご馳走として共食する姿は、ラオスの農村一般にみられる牛・水牛肉消費の慣行的なありようである。

以下は一般農家の牛・水牛飼育形態の現状と問題について、聞き取り調査で得た資料をもとに述べる。今回の調査ではモンヤカムの集落でも聞き取りをおこなったが、主に得た事例はルーやラオなどタイ系の低地農村のものである。

〔2〕牛・水牛の飼育形態

（1）放牧を組み込んだ飼育形態の諸タイプと放牧適地の縮小

隣国タイでは、農地の拡大等の要因により、放牧適地の縮小が早くから進んだ。比較的遊閑地があり、牛・水牛の最大の山地であるタイ東北部でも、雨季の繋ぎ置き飼育は一般化している。農外就労口が付近に無い状況では、労力のかかる繋ぎ置き飼育をしてでも牛・肥育転売目的で牛・水牛を飼う。しかし、雇用労働市場が拡大し農外就労口が増加すると一般農家は飼育を放棄し始め、タイの牛・水牛頭数は1990年代以降、急減する。

ラオスの場合、現在でも放牧適地は比較的多く、放牧を組み込んだ飼育形態が主流である。放牧の場所は、若い林、林傍、沿道、畦、休耕期の圃場などである。2003—2004年度調査では、ルアンパバーン、ウドムサイ、サワンナケートの各区域の地方農村を回って、牛・水牛飼育形態にかんする概括的聞き取りをおこなったが、放牧と繋ぎ置きの季節・時間帯による組み合わせに着目すると、次の4つのタイプが見受けられた。すなわち（A）年間を通じて終日放牧するタイプ（役畜使役期間のみ連れ戻し、繋留する場合を含む）、（B）年間を通じて、朝昼は放牧し、夕方から夜間は繋留するタイプ、（C）乾季は終日放牧し、雨季は夜間のみ繋留するタイプ（乾季A／雨季B型）、（D）乾季昼間のみ放牧し、乾季夜間と雨季終日繋留するタイプ（乾季B／雨季繋留型）である。

タイプ選択に関わる要因については、十分な資料を持ち合わせておらず、その検討は今後の課題である。ただし、Aタイプは放牧適地の豊富さを背景にしていると推測しうる。ルアンパバーン県域では、メコン河流域U村、カーン川流域P村、ナムバーク郡ボンサアート村、ソンチャー村などで事例を得た。Bタイプについては、ルアンパバーン県パークウー郡F村などで事例を得た。当地の村人は夜間は盗難の懸念のため牛・水牛を繋留している。彼らは隣村のカムの村人が盗むと話す。隣村のカムは新しく移住してきて所有農地の乏しい人々である。移住や貧富格差増のほか、モータリゼーションによる交通の広域化や交通量の増加、牛・水牛流通の活発化も、盗難の促進要因になっているかもしれない。ただし、治安悪化が一般的とはいえない。逆の例もある。共同調査候補地ナーモ郡アーイ村（ナーサワン村）での聞き取り事例である。村人が話すには、かつては近隣の高地ラオの村人が牛・水牛をみつけ次第、銃で撃って食べてしまうので、放牧はできなかった。牛・水牛を繋留して飼料を与えねばならず大変だった。しかし、1995年以降、協力関係がとれるようになり、放牧が可能になった。Cタイプは、雨季に放牧適地が不足する村にみられた。たとえば、前述のアーイ村は牛・水牛放牧が可能になったわけだが、周囲の森は深いので、とくに牛は入らない。乾季は圃場で刈り株の芽などを食むが、雨季は圃場にも入れず、田端で草を食むが、それでは不十分なので、夜間繋留し、刈り草を与えている。Dタイプは放牧適地の不

足が通年に及ぶ村で、たとえば、サワンナケート県セータムアク T 村などで事例を得た。

放牧適地の不足については、次の要因を考える。第1は、農地の拡大、二期作・二毛作による作付の通年化など農業振興による土地の放牧利用への制限である。アーイ村のように、中国向け作物の栽培プロジェクトとの関係で、行政に牛・水牛の放牧禁止の動きがみられる事例もある。

第2は、焼畑禁止による焼畑利用後の若い林の減少である。焼畑後、土地はしだいに林の状態に戻るが、焼畑後、1～2年の若い林はパー・ラオ (paa lao)、3年たつとパー・ケー (paa kae)、5年たつとパー・ドン (paa dong) と呼ぶ。パー・ラオの「ラオ」は萌え出した若く明るい緑の草や木の芽の状態をいう言葉である。パー・ラオでは、生え出した若木はまだ丈が低く、牛・水牛が若芽を食べることができる。草も豊富で牛・水牛が食べるものがたくさんある。パー・ケーの場合も、まだ幹が細くしなやかで、押せば、しなり、牛・水牛が葉や芽を食べることができる木がある。パー・ドンになると、もはや牛・水牛が入っても、食べるものがない。前述のアーイ村周辺の森はこの一例といえる。

放牧適地が縮小すれば、放牧された牛・水牛が農地に入り、作物を食害することも多くなる。食害があっても、栽培者側が把握することもなく放置される、おおらかなケースもある。しかし、ほとんどの調査地で、放牧した牛・水牛が農産物を食害し、弁償沙汰になる件はしばしばあると聞かされた。弁償事件の頻発はラオス北部において従来両立してきた放牧と農業の関係が新たな局面を迎えつつあることを示している。

食害があった場合、栽培者が牛・水牛所有者に弁償を求め、村長が裁定する。たとえば、ルアンパバーン県パークウー郡ウー川沿いのルーの集落 F 村では、村人は次のように話す。すなわち、田圃の柵 (フア) は通常 1.7 m ほどの高さである。柵が出来たら、もし水牛がその水田に入って、稲を食べても、水牛の所有者は 100% 弁償しなくてよい。70% くらいでよい。柵に欠陥がなければ、100% 弁償しなければならない。判定は村長がおこなう。通常は、失った収穫予定分と等量の粃を、被害者に弁償する。粃がなければ相当額を現金で支払う。裁定のあり方については、今後各地のデータを集めていきたい。

(2) 飼育における人と牛・水牛の関わり

放牧適地の縮小とそれに伴う問題に注目したが、現在もラオスにおいては牛・水牛所有者の大半が、放牧を組み込んだ飼育形態をとっていることに変わりはない。そのことは今回調査したルアンパバーン、ウドムサイ、サワンナケートのいずれの農村においても確認できた。

放牧を組み込んだ飼育形態では、繋ぎ置きをみの飼育に比べて、牛・水牛を家畜として完全に馴化しきれず、繁殖や育種をコントロールできないし、疫病対策もとりにくい。人にとって牛・水牛は半野生・半家畜的な存在となる。しかし、食料を人に完全に依存しない分、飼育者は飼料確保の労働や金銭的負担を負わなくてもよい。ラオスにおける人と牛・水牛の関係は、適度な距離をもって利用しあう、互いにとって比較的快適な関係のように思える。以下は、両者の関係に関わるトピックをいくつか挙げる。

① 帯同・見回りにかんしては、終日放牧では、毎日定期的に見に行くか、数日に1回見に行くか、まったく見に行かないかになる。放牧中、牛・水牛がどこにいるかは、飼い主はだいたい見当をつけているので、探すのにさほど手間取らないと話す人が多い。朝から夕の放牧では、ずっと誰かが帯同する例もある。夜間繋留から昼間放牧の切り替えの際の移動は、人が曳いておこなうケースと牛・水牛が自分で移動するケースがある。放牧中の個体の首に鈴を吊るす人もいれば、そうしない人もいる。

② 牛・水牛に、塩を与えて主人を認識させる。この点にかんする飼育農家の言をいくつか紹介する。「朝夕塩をやる。草はやらない。水牛は塩を美味しいと感じるので、塩をやると次は自分で戻ってくる」(パークウー郡 F 村、ルー)。「放牧した水牛を4、5日に一度見に行ったときに塩をやる」(ナムパーク郡 S 村、モン)。「あたりは深い森なので、放牧しても水牛は入らず、田端にいる。飼料足りないで、夕方繋留後、水牛に刈り草を与える。稲刈り後は、刈り株に青い残り芽が次々に出るので、水牛はそれを食べる。あたりに塩井があり、牛・水牛は勝手になめに行くので、与えなくてもよい。ただし、仔のとき、塩を食べさせて、飼い主を覚えさせる」(ナーモ郡アーイ村)。「通年放牧の水牛を週1度見に行くときに、モチゴメに塩を入れてあげる」(ナーモ郡アーイ村)。

③ 繋留の場所は、昼間繋留では林や休耕田である。夜間は家の近く、高床下、あるいは出作り小屋への繋留である。この点に関する言もいくつか紹介しておく。「雨季、放牧すると稲を食べるので、林のなかに5mほ

どの紐で繫留し、広い範囲の草が食めるようにしておき、朝から夕まで過ごさせる。紐が首に絡まるおそれがあるので、見張っておく。夕方・夜間は家の近くに移し、2mほどの紐で繫ぐ。朝夕、塩をやる。草はやらない」(パークウー郡F村)。「雨季は昼間も繫留する。10～20mの紐である。道端の草を食む」(サワンナケート県セータムアクT村)。「雨季は夜間、出作り小屋に繫留する。1.5mの紐を用いる」(サワンナケート県セータムアクA村、カム)。

④ 繫留時には火を焚き、煙でいぶして虫除けする。この点に関しては次のような言を得た。「5月から9月まで夜じゅう煙を焚く。水牛は家の近くに置き、水牛の近くで寝る。ヘップ(蚤)、リアブ(大型蠅)、メーン・デーニルアンが5月以降の雨季に出る。蚊や蛭は年中いる」(パークウー郡F村)。「雨季、夜7時から9時にかけては虫が多いので、焚き火して燻す。そばに人が付いていてやる。その後は涼しくなり、虫はいなくなる」(ナーモ郡アーイ村)。「6月は夕方5時から朝6時まで煙で燻す。7月になれば、雨が降り、水牛は泥を自分の体にすり付け、虫を防ぐことができるので、燻さなくてもよい」(サワンナケート県A村、カム)。「夕方から朝6時まで焚き火する。雨の日はやらない。晴れの日のみやる」(サワンナケート県P村、スアイ)。

4. まとめ

以上、ラオスの牛・水牛(肉)流通、および農家の牛・水牛飼育形態の現状について現場調査での見聞をもとに述べた。牛・水牛流通に関しては本年度の調査で、1990年代以降の流通の自由化の状況を再度確認した。牛・水牛肉流通の活発化、人々の地方都市や幹線道路沿いの開発地区への移動と結びついているとの印象をもった。従来の生態と切り離されて移動してきた人々が、新しい可能性のある職業のひとつとして牛・水牛流通に参入し、また彼ら新来住者によって食肉消費市場が拡大しているようであった。

ただし、市場での食肉需要が増大し、急増した業者間の買い付け競争が激化する一方で、供給側に計画的な大量生産への転換の動きはない。ファーム経営への転換は進んでおらず、効果的な振興施策も見当たらない。地方一般農家では放牧を中心とした飼育形態が現在も主流だが、市場農業に適合的な土地利用形態への転換のなか、林野の保全利用のあり方も変わりつつあり、放牧が制限され始めた地域もある。こうした状況のなか、牛・水牛の食害が農産物栽培者と放牧者の間で弁償沙汰になる事態が多発している。ただし、今後、さらに放牧適地の減少が進み、放牧の困難による繋ぎ置き飼育への転換、さらに雇用労働市場の拡大による一般農家の飼育放棄、食肉消費需要をまかなうための隣国からの牛・水牛の輸入へと、隣国タイのように事態が進むかどうかはわからない。

次年度以降は、ラオスにおいて人と牛・水牛の関係が今後いかにあるのが望ましいのかという課題を念頭に置きつつ、次のような諸点に注目し、過渡的現状を検討したい。たとえば、開発や移動にともない、人口が減少する地区と増加集中する地区の差がますます顕著になってきている。前者の牛・水牛放牧の動向を把握する必要がある。後者では農業地拡大に伴い、放牧を制限する傾向がみられる。また、淡水資源の乱獲による動物性蛋白質源の減少に伴う漁撈・採集量の減少が、食肉購買需要増の一因になっている可能性がある。豚・山羊・鶏等其他の家畜・家禽全体のなかでの牛・水牛の位置づけが、一般農家のなかでどのように変化しつつあるのかも確かめる必要がある。これらの点に注目し、牛・水牛放牧・土地利用・生態環境・飼育農家の生活戦略などの相互関係について検討したい。また、社会主義体制期およびそれ以降の地方農村における牛・水牛肉食慣習や嗜好の特色と変化に関する調査、および、牛・水牛肉流通に関する補充調査をおこないたい。調査方法としては、ここ2年は広域的概括調査に比重を置いたが、今後は特定調査地域の集約調査も試みたい。

引用文献高井康弘 2005、「ルアンパバーンの牛・水牛肉流通と黒タイ来住民—ラオス北部の社会経済変化の一側面」、北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティ：基層と動態』東信堂、288—303頁。

UNDP (United Nations Development Programme) 1996, Socio-Economic Profile of Oudomsay Province.

Abstract

This study focuses on the relationships between human and cattle/water buffalo in Laos. There are two main fields to investigate the relationships. One is peasants and cattle/water buffaloes interactions in the ecological environment. The peasants usually pasture cattle/water buffaloes in forests and fields. They raise cattle/water buffalo as draft animals and movable properties. It has also been employed as offering gods or spirits, or as cooking for the main dish of the feast. The research aims to investigate various indigenous knowledge and practices associated with peasants – cattle/water buffalo interactions. Two is the local markets. The research aims to investigate the changing phase of local markets, the socio – cultural background and the influence upon the ecological environment.

In 2003 – 2004, the field survey were dealt in Muang Xai City and Namo District in Oudomxai Province, Luangpabang City, Pak Ou District and Nam Bak District in Luangpabang Province and Savannakhet Province, mainly. And the survey focuses on the current issues of the two main fields as mentioned above.

The findings on the changing phase of the local markets are as follows: Since 1990' s, the merchants who deal with cattle/water buffalo increase rapidly in number in Luangpabang City, Namthum, Nambak, Muang Xai City and Namo. The increase has such social or political-economic background as market economy development, motorization and migration. Tai-dam newcomers play important roles in the cattle/ waterbuffalo market system of Luangpabang City. Kham newcomers play important roles in the cattle/water buffalo market system of Muang Xai City and Namthum. The merchants sell beef, water buffalo meat and pork under a rotation system in the markets of Muang Xai City, Namo, Namthum and Nambak. Lao play important roles in the cattle/water markets of Savannakhet and Tha Kaek, while Vietnamese play important roles in the market of Nongkhai and Udonthani.

The findings on the relationships between peasant and cattle/water buffalo are as follows; Modern farm system do not induce in the areas. Most of cattle/water buffaloes are pastured in forests and fields. There are 4 types of the pasture, that is, (A) pasture all day in all seasons, (B) pasture in the day / tether in the night, (C) Type A in the dry season/ Type B in the rainy season, (D) Type B in the dry season/ tether all day in rainy season. The peasants select Type C or Type D in the areas where the peasants have problems by the shortage of pasture fields. The shortage may be caused by the development of agriculture and the restriction on shifting cultivation in the areas.



写真1 ムアンサイ・ノンメンダー市場の水牛肉売り



写真2 ファイオン村の牛・水牛屠畜販売業者



写真3 放牧中の在来牛と子供



写真4 水牛肉の生ラップ料理の小宴（アーイ村）